

個が育つ集団をつくる予防的・開発的な生徒指導

ー 組織で取り組む 認め合い、高め合う授業づくりー

学校力開発分野(15220917) 鈴木 有 人

取り巻く環境の多様化・複雑化により、心に不安を抱える子どもは少なくない。いじめや不登校などの不応問題が誰にでも起こりうる今、すべての子どもを援助する予防的・開発的な生徒指導の推進が求められている。本研究では、主に人間関係形成に資する手法と生徒指導の3機能を生かす日々の授業について、その意義や有効性を検討した。結果、継続的な取り組みによって、子ども個々には自己肯定感や責任感などが育ち、集団には共感的な人間関係や規範意識などが形成されることが期待できるとわかった。

[キーワード] 予防的・開発的な生徒指導、日々の授業、個と集団の相互作用、生徒指導の3機能

1 問題の所在と方法

(1)問題の所在および研究の背景

我が国では、教育相談や特別支援教育の視点を生徒指導の機能に組み入れた概念のとらえ直しや、各自治体におけるスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの設置など、近年生徒指導に関する理解の進展や環境の整備・充実が図られてきている。

しかし、現状は、学校や行政の努力が必ずしも児童生徒の健全育成に結びつかない状況が続いている。内閣府(2014)によると、日本の若者は諸外国に比べて自己肯定感が低く、友人関係や学校生活の満足度も低いことなどが明らかになっている。いじめ件数の増加や不登校の長期化といった背景には、こうした若者の意識が深く関連していると思われる。筆者も近年、特別な支援を要する子を取り巻く学級経営の難しさや、他者との協力を苦手とする子の増加を感じる。また、以前は意欲的に学んだ活発な子も後に不登校傾向に陥ることも知り、不応問題はどの子にも起こりうるという課題に直面している。

これらの問題の多くは、取り巻く環境の多様化・複雑化により、子どもたちが本来の能力を発揮しづらくなっていることや、人間関係の希薄化により相手を信頼しきれない児童生徒の心の不安などに起因しているものと考えられる。

生徒指導は、もはや特定の子どもの対象とした治療的な指導だけでは十分と言えなくなっている。また、「子どもの問題行動が多様化し、学校だけの対応では不可能なケースが増えた。」という八並

(2008)の指摘のとおり、教師が単独で生徒指導を実践するには限界に達している。しかし、学校現場では、「依然として『問題行動や非行対応＝生徒指導』という受け止め方が強い。」(八並, 2008)

「生徒指導提要」(2010)に、「生徒指導は、すべての児童生徒の人格のよりよい発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で、充実したものになることを目指します。」とあるように、これからの生徒指導は、すべての児童生徒に対して予防的・開発的に行うことが求められている。また、子どもの心を組織で多面的・多角的に分析する必要もあろう。

以上から、予防的・開発的な生徒指導に組織で取り組むことによって、子ども個々には自信や責任感、思いやりの心が育ち、相互作用的に集団には共感的な人間関係や規範意識が形成されるのではないかと考え、本主題を設定した。

(2)研究の目的

本研究では、予防的・開発的な生徒指導とは何か、なぜそれが必要なのかを述べ、その意義や有効性を明らかにする。また、生徒指導の3機能を視点にした授業実践により、個および集団がどう変容するかを分析・考察していく。

(3)研究の方法

予防的・開発的な生徒指導の意義や授業における生徒指導については、先行研究や文献を整理する。また、個別指導と集団指導の相互作用を検討するために、研究主題にかかわる授業を実践し、その成果と課題について考察する。さらに、本研究で学んだ理論や実践を実習校や現任校で校内研

修や情報提供を通して紹介したり、学年での授業実践や教師の在り方についても可能な範囲で提言したりしていきたい。

2 先行研究の検討

(1) 予防的・開発的な生徒指導の意義

開発的な生徒指導とは、「全児童生徒を対象とし児童生徒の発達を促す基本的な援助」（石川，2015）であり、一次的援助サービスとも言われる。具体的には、「入学時の適応や学習スキル、人間関係スキル訓練（SST）」（石川，2015）、構成的グループエンカウンターなどのプログラムが挙げられる。また、石隈（2014）は、「わかりやすい授業づくりや自分を発揮できる学級づくりなども、重要な一次的援助サービスである」と述べている。

いっぽう、予防的な生徒指導とは、「問題の除去および問題への耐性を高める援助」（石川，2015）であり、二次的援助サービスとも言われる。これを石隈（2014）は、「苦戦している子どもやこれから苦戦する可能性の大きい一部の子どもの援助ニーズにタイムリーに応じ、子どもの成長を妨害しないようにすることを目的とする」と述べている。具体的に石川（2015）は、「不登校の発生率が高ければ、事前のピアサポート活動やグループ替えを行う指導」などを例示している。

では、今なぜ予防的・開発的な生徒指導が必要とされているのだろうか。石隈（2014）は、「すべての子どもは発達上や教育上の課題を遂行する上で援助を必要としている。」あるいは、「子どもは、苦戦や危機に出会い、日ごろの援助以上の援助を必要とすることがある」と述べ、学校心理学の境地からその必要性を提唱している。

また、飯田（2004）は、心理教育的援助サービスを視点とした授業に期待される効果として「学習意欲が高まる、自尊感情や自己効力感が高まる、人間関係が広がる・深まる、進路に対する関心や自信が高まる」といった点を挙げ、予防的・開発的な生徒指導の可能性を示唆している。

原田（2003）は、「児童生徒にとって学校生活が有意義でありかつ充実していれば、そのことが問題行動を未然に防止することにつながる」と述べ、開発的な生徒指導がすべての児童生徒にとって有効であることを示している。

予防的な生徒指導について、北村（2004）は、「たとえば『困っている誰かが手を貸してくれる』とか

『答えを間違えてもばかにしたり冷やかしたりしない』などの項目を児童生徒の姿で具体的に示し、計画的・意図的に取り組むことが重要である」と、その意義の大きさを強調している。

(2) 授業における予防的・開発的な生徒指導

生徒指導はあらゆる教育活動において機能するが、我が国の教育カリキュラムの中に「生徒指導の時間」という位置づけはない。では、実践の中心となる場はどこと考えればよいのだろうか。生徒指導の実践場面は、例えば学級活動や道徳の時間に構成的グループエンカウンターやピアサポート活動、ソーシャルスキル教育、アサーショントレーニングなどに取り組む場面がイメージされやすい。確かに、こうした取り組みは生徒指導の機能を発揮するには効果的な場であり、実際そのような実践事例は数多く存在する。

しかし、岡山県（2011）・岩手県（2005）総合教育センターが県内の生徒指導主事および主担当を対象にしたアンケートの結果では、生徒指導に取り組む機会として、特別活動や学校行事よりも各教科の授業時間を第一に挙げている。生徒指導実践の場として、授業場面を重視する傾向が見られる。

こうした動向を踏まえ、「生徒指導提要」（2010）では、「各教科等の学習において、一人一人の児童生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、創意工夫ある指導を行うこと」と、学習指導における生徒指導についての指針を示している。また、その際の留意事項として、「①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性を援助すること」（文部省，1988）と、いわゆる「生徒指導の3機能」を挙げている。さらに、こうした指導が「児童生徒の自己肯定感を高めることやコミュニケーションの成立、よりよい人間関係の構築などにつながります」と、学習場面における積極的な生徒指導の実践の必要性を述べている。

また、水上（2008）は、「学習ルールの指導をきちんと行い、授業を安心の場とすること」や「授業で人間関係を育てること」を通して生徒指導の機能を教科学習の視点にすえるよう訴えている。

実践例としては、東村山市立大岱小学校の授業改革（2011）や、知識構成型ジグソー法が代表的な協同学習などが注目を集めており、児童生徒が主体的に授業を運営し、子どもの学びを支援する教師の裏方的な立ち位置などが特徴として見られる。

「学びに挑戦し続けている子どもは決して崩れない」(佐藤, 2006)という主張が, 予防的・開発的生徒指導のアプローチとして認知され始めてきている。

3 実践と結果

本研究の実践は, 教職専門実習Ⅱで配属された山形市立A小学校の5年生(22名)を対象に, 構成的グループエンカウンターを取り入れた道徳を行ったことについてのものである。本時では, 主に個の変容を探ることを目的とした。学習活動と抽出児Bの様子は表1のとおりである。

◆主題 自分のよさを見つけよう(個性伸長)

◆ねらい

他者から見た自分のよさに気づかせ, 長所を積極的に伸ばしていこうとする意欲を育てる。

表1. 学習活動と抽出児Bの様子

学習活動	B児の様子
自分や友達のよさを考え、ワークシートに記入する。	・自分の特性を1つも書くことができない。 ・友達の印象を1人につき2～3こずつ書く。
友達のよさを伝え合う。	・友達から自分のよさを伝えてもらう場面で目が輝く。 「何? もう一回言って。」と尋ねながら笑顔で自分の長所をメモする。
本時の活動をふり返り, 感想を書く。	・「自分から見ると何でもないことでも, 人から見るとよく思われているからよかった。」(感想より)

他の児童から得た感想を抜粋して, 次に示す。

- ・自分のいい所は書けなかったけど, クラスの人から自分のいい所をこんなにみつけてもらってうれしかったです。
- ・自分がどう思われているのかドキドキしていたけど, みんな意外といい所を言ってくれたのでホッとしました。
- ・私は, これからも友達にやさしい人になろうと努力していきたいです。

4 考察

いじめや不登校といった不適応問題が誰にでも

起こりうる今は, どの児童生徒にも, 将来予想される課題や困難を乗り越えるための援助が必要となるだろう。子どもたちへの援助は決して学校教育だけで完結するものではないが, 学校に求められる予防的・開発的な援助として, 1つは道徳や特別活動において個や集団のニーズを把握した上で人間関係形成や自己理解・他者理解等に関する活動プログラムに取り組むことと, もう1つは, 生徒指導の3機能を学習指導に組み入れて日々の授業をとらえ直すことを挙げたい。

筆者は, 教職専門実習において, 道徳と学級活動の授業を実践した。本時で学んだことを日常化させる継続的な指導はできなかったが, 友達との交流によって自己理解を深めたり, 自尊感情の高まりを自覚したりすることは貴重な経験となることを, 筆者は子どもたちの言動から感じ取った。しかし, 本研究全体に言えることでもあるが, 授業で見た子どもたちの姿が本当の姿かと見極めることは難しく, 子どもの心を客観的に検証しづらい生徒指導の奥の深さも実践を通して学んだ。

生徒指導は, 日々の授業において実践するのが最もふさわしい。「生徒指導の機能が働くことにより, 子どもの学習や生活態度が安定し, 学習指導を円滑に実施することが可能になり, 逆に, 学習指導が充実することにより, 子どもの基本的な学習内容や資質能力が定着し, 生徒指導の本来のねらいも達成されていく。」(河村, 2011)からである。

そこで, 筆者は, 生徒指導の3機能を授業の視点に位置づけ, 各教科の学習における教師の役割と子どもの姿を表2のとおり整理した。

表2. 教師の役割と子どもの姿

教師の役割	子どもの姿
自己選択・自己決定の場を提供する。	学習課題に対する自分の考えをもつ。
共感的な人間関係を育成する場を設定する。	他者とかかわりながら話し合いやグループ等での活動に取り組む。
学びを価値づけ, 自己存在感を味わわせる。	ふり返りを通して個の学びの高まりを実感する。

こうして見ると, 表2に示す視点はごく当たり前のように思われ, 多くの教師がこれまでも生徒指導の3機能を生かした授業に取り組んできたことがわかる。つまり, 授業における予防的・開発

的な生徒指導とは、新しいものでも特別なものでもないのである。にもかかわらず、子どもの不適応問題がなかなか改善されないのはなぜだろう。当たり前の実践がなぜ効果として表れにくいのか。この状況の改善策には、教師の意識改革が必要と筆者は考える。大切なのは、教師が個々の子どもの学びを尊重する意識をより強くもち、より多くの教師が生徒指導の視点を加えた授業に取り組んでみようと思えることではなかろうか。

日々の授業による予防的・開発的な生徒指導は、児童生徒の自信回復や問題行動の未然防止につながるだろう。言い換えれば、個々の子どもには自己肯定感や責任感、困難に対する耐性などが育ち、個の成長の相互作用として、集団に共感的な人間関係や規範意識が育つことが期待される。以上のことから、予防的・開発的な生徒指導によって、筆者が目指す明るく、優しく、強い個や集団がつけられる可能性があることが明らかになった。

5 到達点と課題

(1) 研究に対する到達点

先行研究の検討から、これからの生徒指導は問題行動や非行対応といった治療的な指導よりも、すべての児童生徒を対象とする予防的・開発的な生徒指導が重視されることがわかった。今後、どの子どもにも課題や苦戦、危機に立ち向かうための援助をする必要があるからである。また、有効な手法として、構成的グループエンカウンターやピアサポート活動、ソーシャルスキル教育、アサーショントレーニング、グループワークなどの活動プログラムがあることや、各教科の学習において、わかる・楽しい授業を工夫することが子どもたちの自己指導能力の育成につながる可能性があることも明らかになった。

実践からは、どの学級でも子どもたちがコミュニケーションを図り他者と協力し合う姿を確認することができた。個や集団のニーズを把握し、さまざまな活動プログラムを活用することは効果的であることがわかった。

(2) 今後の課題

現時点で着手していない研究は、生徒指導の3機能を視点にした各教科の授業実践と、個と集団の相互作用に関する考察、組織対応に関する提言の3点である。

各教科の授業実践については、表2をより細分

化したチェックリストを作成し、同僚にも実践を呼びかけて視点の共有化を図るとともに、複数の教師でその成果と課題を探っていききたい。

個と集団の相互作用に関する考察は、現任校でQ-Uアンケートを年2回実施し、個および集団の変容を客観的に考察していく。

組織対応に関する提言については、本研究で学んだ理論や実践を実習校や現任校において校内研修や情報提供を通して紹介する。また、機会があれば近隣校の教師との懇談を通して、予防的・開発的な生徒指導の連携を提言したい。さらに、現任校の親子行事や地域行事を生徒指導の3機能の視点で観察し、社会教育における生徒指導の可能性について家庭や地域の人々と一緒に模索していければとも考えている。

引用文献

- 有村久春(2004)『生徒指導・教育相談研修』, 教育開発研究所.
- 原田信之(2003)『心をささえる生徒指導～生徒支援の理論と実践～』, ミネルヴァ書房.
- 石川美智子(2015)『チームで取り組む生徒指導～アクティブ・ラーニングを通して深く学ぶ・考える～』, ナカニシヤ出版.
- 石隈利紀・家近早苗・飯田順子(2014)『学校教育と心理教育的援助サービスの創造』, 学文社.
- 河村茂雄(2011)『生徒指導・進路指導の理論と実践』, 図書文化.
- 文部科学省(2010)『生徒指導提要』, 教育図書.
- 文部省(1988)『生徒指導資料 第20集「生活体験や人間関係を豊かなものとする生徒指導」』, 国立印刷局.
- 八並光俊・國分康孝(2008)『新生徒指導ガイド～開発・予防・解決的な教育モデルによる発達援助～』, 図書文化.

参考文献

- 岩手県総合教育センター(2005)『生徒指導の機能を生かした授業づくりの手引き』
http://www1.iwate-ed.jp/tantou/kyouka/seika/april/h17_11c4-02.pdf
(最終閲覧日 2015年12月26日)
- 内閣府(2014)『特集 今を生きる若者の意識』
<http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26gaiyou/tokushu.html>
(最終閲覧日 2015年12月12日)